

*The Journal of
Nagasaki University of Foreign Studies
No. 26 2022*

話そうとする姿勢を涵養する授業とは
－ “お笑い道場（落語の授業）” 参加者のコメントを分析して－

川崎 加奈子

What is a class that cultivates an attitude of trying to speak?
Analyzing the comments of “*Owarai dojoo-rakugo class*” participants

KAWASAKI, Kanako

長崎外大論叢

第26号
(別冊)

長崎外国語大学
2022年12月

【研究ノート】

話そうとする姿勢を涵養する授業とは
－ “お笑い道場（落語の授業）” 参加者のコメントを分析して－

川崎 加奈子

What is a class that cultivates an attitude of trying to speak?
Analyzing the comments of “*Owarai dojoo-rakugo class*” participants

KAWASAKI, Kanako

Abstract

In recent years, language teaching advocates have argued that language education should cultivate an attitude of learners trying to speak. In this study, I qualitatively analyzed an example of a “*rakugo class*” that seems to have succeeded in cultivating this attitude and explored the factors behind its success. The participants were given tasks involving both speaking their own words and practicing and presenting *rakugo*. They practiced repeatedly and devised ideas to complete the tasks, giving them a greater sense of accomplishment. The tasks were not easy, but learners were greatly assisted by peer participation, the excellent instructor, and the uniqueness of the *rakugo* teaching materials. I think that my findings will provide hints for class practices that cultivate an attitude of trying to speak.

キーワード

話そうとする姿勢, ことばの教育, 落語の授業, 三遊亭圓窓

1. はじめに

平成20年3月に発表された文部科学省『小学校学習指導要領』において、国語科の目標として「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる」ことが掲げられている。そして、その目標の第一項目には学年別に、第1学年及び第2学年では「進んで話したり聞いたりしようとする態度」、第3学年及び第4学年では「工夫をしながら話したり聞いたりしようとする態度」、第5学年及び第6学年では「適切に話したり聞いたりしようとする態度」という項目が含まれている。話すことと聞くことの力を育成するのは、話す技術やことばの表現だけではなく、話し手あるいは聞き手として積極的にコミュニケーションを“しようとする態度”、伝えるための方策を話者自身が工夫し、適切な言葉を選びながら話したり聞いたり“しようとする姿勢”を涵養することが必要であると謳われていると言えよう。このような態度の涵養は小学校国語教育だけに必要なものではなく、外国語学習を含むあらゆることばの教育、ひいては実際のコミュニケーション場面でも必要であることは自明である。コミュニケーション場面のうちの一つである大学における日本語学習者の発話姿勢について、川崎（2014）は特に発表活動における発話姿勢に着目し、「棒読みだけになる場合が多い」と指摘する。そして、棒読みとなる要因として4つを挙げ（p.47）、うち二つの要因を「伝え

たいという思いがない」「ことばの伝え方やことばが伝わる喜びを獲得していない」とする。つまり、発表時のそれらの問題は学習指導要領の言うところの「進んで」「工夫して」「適切に」話そうという姿勢が欠如していることによるものであり、積極的に自ら伝えようとする姿勢を涵養することこそが発話姿勢に関する問題を解決する糸口になると考えられる。

本稿では、過去に実施された一つのイベントに注目し、イベント終了後に参加者たちが寄せたコメントを分析し、そこでどのような活動があったのか、参加者がどのような心の動きを見せたのかを詳細に再現したい。更に参加者がそのイベントの活動によってどのように成長し、自ら積極的に伝えようとする姿勢がどのように涵養されたのかを考察することにより、ことばの教育のあり方を考え直すヒントとして提示したい。

2. 分析対象

本稿が分析の対象とするのは、噺家六代目三遊亭圓窓（以下、「圓窓」）のホームページ『圓窓落語大百科事典』に残された一つのイベントの記録である。この記録を対象としたのは、参加者が「話す」という活動を生き生きと楽しんだ様子を読むほどに浮かびあがるため、その一連の活動を考察することで話そうとする姿勢の教育へのヒントが得られると考えたからである。

まず、イベントの性格を整理する。このイベントは公益財団法人富山県ひとつづくり財団が主催したものである。当財団のホームページによると、この財団は「県の未来を拓く有為な人材育成をするために」事業を行う団体であり、その一環として子どもの育成事業を展開し、“きらめき未来塾”と称する子どもの創造力・自己表現力・柔らかな思考力を育てることと目標とした“道場”を開いている。きらめき未来塾担当者によると、塾は2003年に始まり、当時は右脳活用道場、思考道場、ディベート道場、お笑い道場の4つの道場が開かれていたという。参加者の公募は、きらめき未来塾の作成した案内チラシが県内各小学校に配布され、それぞれの子どもたちと家庭に行き渡る。参加申し込みは、小学校がとりまとめるのではなく、子どもたちがそれぞれ個人として直接申し込むことになっている。募集定員は一つの道場に対して例年20名程度であるという。つまり、このイベントには、県内各地の小学生が、自らのあるいは家族の意志によって、知らない者同士が集まってくるのである。

本稿が分析対象とするイベント、すなわち圓窓がホームページに記録しているイベントは、きらめき未来塾が開催する上記4つの道場のうちの「お笑い道場」で、2004年に開催されたものである。以下、このイベントの呼称を「お笑い道場」とするが、引用する講師及び参加者たちのコメントには、「きらめき未来塾」「落語道場」「お笑い道場」が混在する。いずれも同一のイベントである。

上記きらめき未来塾担当者によると、道場の講師はきらめき未来塾がスタートした2003年から2014年まで圓窓が務めた。圓窓が講師として招かれた理由は記録に残っていない。圓窓は、2000年に小学校4年生の国語教科書（教育出版）に初めて落語が教材として掲載された際の、教材の著者である。教科書掲載時から全国各地の学校やイベントを巡り、子どもたちや教育関係者たちを対象とした「落語の授業」を繰り広げていた。お笑い道場の講師就任もその一環であったと考えられる。圓窓はそれら講演や落語の授業の記録の多くをホームページ上に掲載している。お笑い道場の記録はそのうちのひとつで、ホームページ上のタイトルは「教科書の中の落語－子どもの落語教室－2004年度 富山県・きらめき未来塾 お笑い道場（落語を学ぶ）」となっている。「落語を学ぶ」の言葉は、落語を娯楽ではなく教材として強く意識した圓窓による付記であると推察される。2004年のお笑い道場は、前年に

続き圓窓が講師を務めた2回目の道場であり、子どもたちの夏休みを利用して週一回、各回2時間で全6回にわたって実施された。子どもたちのコメントは全部で16人分掲載されている。当時の圓窓は自身の講演や授業の“必須の課題”として感想文を書くことを求め、更にそれをホームページ上で公開することを公約していたことから、参加した子どもたちのうち16名が感想文を書いて圓窓に託したと考えられる。

3. 分析と考察

圓窓ホームページ上の「きらめき未来塾」の記事は、圓窓のコメントと、参加者である子ども16名のそれぞれ300字程度のコメントのみで構成されている。本章では、ホームページの記事内容を整理しながら、お笑い道場の流れ及び講師である圓窓と子どもたちの心の動きを考察する。その考察によって、お笑い道場では何が行われたのか、この活動が子どもの話そうとする姿勢を涵養できたのか否か、そしてその成否の要因は何であったのかの答えを探りたい。

尚、お笑い道場では当時の教育出版の小学4年生の国語教科書に掲載された落語が教材として使われていることから、参加した子どもたちに少なくとも低学年の児童はいなかったものと推察される。本稿では引用元の表現を尊重し、参加者を「子ども」「子どもたち」と呼ぶ。

3.1 圓窓による記録部分

道場は週1回、6週にわたって開催された。圓窓による記録の部分は、6回の活動それぞれの終了時に、その日の感想を数行記し、圓窓が自分の記述に表題を付けている。表題を抜粋すると以下のとおりである。この表題から、圓窓がその日に“到達目標”と設定した内容がうかがえる。

- 一日目：「着物は一人で着られるようにしよう」「大きな声を出そう」
- 二日目：「自分の名前の由来を教えて」「背筋を伸ばして座ろう」
- 三日目：「落語ライブ 四席」[[権兵衛狸][垂乳根][松竹梅][寿限無]]
- 四日目：「子供たちの話ライブ」「面白オ〜い話」「怖ア〜い話」
- 五日目：「発表会に向けて特訓」「落語を聞くのは楽。でも、やるのはつらいぞ」
- 六日目：「いよいよ発表会！」「今日は お客さまがいる」

以下、表題とコメント部分から圓窓の心情を考察する。

一日目は、お笑い道場には着物を着て塾に参加させることにしたとし、「着物に触れることの頻度を高めることによって、いつしか一人で着られるように努力もするし、実現もする」と記す。着物が一人で着られることは初日の目標でもお笑い道場終了時の目標でもなく、将来の「いつしか」のために努力し実現に向かうことができるようにとの願いを込めた着物の着用であったことがうかがわれる。この2行に、その場限りの教育目標ではなく将来にわたる子どもの成長を願う圓窓のあり方が見える。この日の活動は、教科書に掲載された落語『寿限無』を子どもたちに読ませることから始まった。しかし、子どもたちの声が小さいことに気づき、「『この部屋にいるすべての人に聞いてもらおう、という気持ちをもって声を出すんだよ』と、繰り返しくりかえし言って励ました。」と記されている。大きい声を出すことを繰り返して指導した圓窓が、「指導した」「教えた」「叱った」「注意した」と

いう語を使わず、「励ました」と記していることに、また圓窓の指導のあり方が見える。この日の活動の中心は、落語を大きな声を出して読むことであった。

二日目は、落語『寿限無』に関連し、子どもたちに自分の名前の由来を話させた。それを知らない子どもたちには次回までに宿題として調べてくることを課した。また、「座り方を指導したのだが、ほとんどがグニャッとした感じに見えたのが、あたしにはちょいとしたショックだった。」と記す圓窓の、噺家としての身体の姿勢に対する美学がうかがわれる。この日の活動の中心は、自分の名前の由来を話すことだったが、これは借り物ではない自分しか知らない話を他者に聞かせることだと言える。

三日目のコメントに「今日まで〔転失気〕〔饅頭怖い〕を複数でそれぞれの役を読み分けて勉強してきたが」とあることから、一日目と二日目は複数の子どもたちがグループになって落語の登場人物の役を読み分けて練習していることがわかる。コメントに「『一人でちゃんとした落語をやりたい』という希望者も出てきた。実は、そういう子たちの出てくることを待っていたのだ。」と記される。本当の最終目標を故意に隠したのか、あるいは目標の高さに子どもたちをひるませたくなかったのか、いずれにしても心ひそかに期待していた「一人でちゃんとした落語をやる」という目標に近づく子どもたちを見出した時の圓窓の喜びが伝わり、してやったりの圓窓の顔が見えるようである。この日の活動の中心は、圓窓の落語ライブ四席を聞くことと、役割分担をした落語の音読である。その他、子どもたちに怖い話かおもしろい話を次回までの宿題として準備するように、指示が出されている。

四日目は、宿題の怖い話か面白い話を全員が披露し、披露時は「窓の暗幕カーテンを活用して雰囲気を出した」と、「舞台装置」作りを工夫したことがうかがえる。圓窓の短いコメント「子たちは生き生きとしてやった。(中略)子たちは怖い話が好きらしい。」から、おそらく半数以上の子どもたちが面白い話ではなく怖い話を準備してきたのだろう。楽しそうに自分の話をし、他の子どもの話を聞いてきゃっきゃと笑う子どもたちの様子が目に見えるようであり、その場の雰囲気の盛り上がりが伝わってくる。この日の活動の中心は、自分の話を仲間にかけることである。この活動のポイントは、自分しか知らない話を語ることと、その話の聞き手が存在することだと考えられる。

五日目の活動は、翌週の落語発表会に向けての練習のことだけが記されている。この日の表題の「発表会に向けて特訓」「落語は聞くのは楽。でも、やるのはつらいぞ」から、厳しい指導もあったであろうし、全員が楽しそうに練習をしていたわけではないことが推察される。コメントの「『この子は無理かなと思わせる』子どももいた」から、子どもの全員が一様に期待通りの語りができたわけではないこともわかる。しかし、続く「でも、『発表会でやる』という。頑張れ!!!!」には、子どもたちの「話そうとする姿勢」を見る指導者としての喜びと、不安と、子どもたちを見守り励ます温かい目が感じられる。

六日目は発表会であった。発表会は、お客さま、すなわち大勢の聴衆がいる。既に仲間となったお笑い道場に参加している子どもたちだけではなく、見知らぬ聞き手がいる。その緊張感が、表題の「今日はお客さまがいる」に集約されている。表題に続く圓窓のコメントは短い。

子たちは見事にやり終えた。誰もが心配していたが、誰もが感動した。笑った。泣いた。

やれば出来るさ 出来ないわけは やろうとしないだけなのさ

聴衆の前で落語を披露する子どもたちの緊張と、必死さと、やり終えたときの会場の温かい雰囲気
がコメントにあふれ出している。何に笑ったのか。何に涙したのか。「出来ないだけは、やろうとし
ないだけ」には、五日目で無理そうに思われた子どもが何かをやり遂げたことが暗示されている。

3.2 子どもたちの感想文

3.2.1 分析の対象と方法

本節では圓窓のホームページに掲載された子どもたちの感想文を考察する。その文面から、感想文
は、イベントが全て終了した後に書かれたものであることがわかる。一人当たり300字前後の感想文
で、それぞれの子どもの感想文の冒頭には圓窓により内容を表す表題が付記されている。16名の子ど
もたちの感想文が載せられているが、定員が20名であることと当時の圓窓のホームページ編集方針か
ら、寄せられた感想文はすべて載せていると考えられる。筆者自身当時ホームページの作成に協力し
ていた経験から、圓窓やホームページ編集者による要約や記述の変更は一切なく、漢字かな等の表記
まで子どもが書いた原文のままの感想文であると推察される。

本節の考察は以下の手順で進めた。まず、分析対象とする感想文のすべてを、書いた子どもの括り
を取って平準に並べ、概観した。次に、その感想文の中で自らの心情を記述している部分を抽出し、
単文の単位に分解した。そして、その単文が言及している事柄の性質に類似のものがあると判断した
場合に、その事柄の性質を表す内容を「主題」として規定した。主題がいくつか立った時点から同じ
主題で語られている文を集約する作業を始め、その作業をしながら考察し、主題の名称と分類は考察
と並行して修正をしていった。

3.2.2 子どもたちの心の動きとその要因

感想文に現れる事柄の性質によって整理し分析した結果、子どもたちがどのようなことを感じ、考
え、行ったのか、また講師圓窓の指導が子どもたちにどのような影響を与えたのかという視点から
のお笑い道場の全体像が浮かび上がってきた。以下に、その詳細を述べる。

浮かび上がった主題は、【参加前の心情】【困難】【達成感／満足】【自分の努力】【仲間の存在】【指
導者（圓窓）】【落語という教材】【次回／未来】【活動全体への感想】である。以下、枠内は本稿で規
定した主題と子どもの感想文の原文である。枠内の下線は筆者による。感想文末の数字は考察の過程
で必要と判断し、子どもの特定のために付した。感想文末に句点がないのは、文の途中で切り取った
場合が多く、すべての抽出結果を句点削除としたためである。一つの感想文が複数の主題に分類され
る場合は、感想文の提示が重複する。

まず、子どもたちの多くが参加の動機を記しており、本稿ではこの主題を【参加前の心情】とし
た。

【参加前の心情】

ぼくはお笑い道場に初めて入る時、心配でした。「上手くできるかな～」 「落語の勉強はどういう
事をするのか」などいろいろ悩んでいました（1）

参加したきっかけは、ぼくはお笑いが好きだから参加しました（4）

この道場でお笑いのごくいを教えてもらおうと思ったからです (6)
 ぼくは最初、落語に対してあまり良い感じではありませんでした (7)
 ぼくが参加した理由は、また三遊亭圓窓師匠に会いたかったからでした (8)
 わたしがお笑い道場に応募しようと思ったのは、去年、兄がお笑い道場に参加しているのを見て、
 ずいぶん楽しそうだったからです (9)
 最初、私は落語はむずかしいものだと思って、最初の道場のとき、少々不安でした (10)
 ぼくは、去年もお笑い道場に行って楽しかったので、今年も行くことにしました (12)
 ぼくは、去年お笑い道場に参加した時、落語というものがとてもおもしろかったので、今年も参
 加しようということになりました (13)
 友達がさそってくれて、それがきっかけになりお笑い道場に参加 (16)

前年のイベントに参加して楽しかったためもう一度参加した子ども、前年の参加者の影響で参加した子ども、落語や「お笑い」に積極的な興味を持つ子どもがいる一方で、「落語は難しい」「心配」「不安」「悩み」「あまりいい感じではない」と消極的な心情を抱いて参加した子どもが少なからずいることがわかる。落語道場の運営の性質上、参加が義務の子どもはいないはずではあるが、家族あるいは学校の教諭たちの勧めによっていたしかたなく参加した子どももいたことがうかがわれる。

活動が始まってから現れるのが、【困難】である。

【困難】

最初は、なかなか覚えられなかった (1)
 やる自信は、ありませんでした。(1)
 最後の発表会では、[転失気] できん張してちょっとまちがえたりした (2)
 29日のとき(筆者注：最終日)にうまく言えなかったことがあった (4)
 最初はおもしろそうな話だと思って[松竹梅]を選びましたが、練習すると難しく、最後の練習日には何も言えませんでした (5)
 初めて高座に上りました。高くてこわかったし、ライトがまぶしかったです (5)
 本番の[松竹梅]は、きん張した (5)
 大勢の中で、表情や声を変える事が、むずかしいという事がわかりました (7)
 セリフがずいぶん多くて、とうとう覚えきれず台本を見ながらやりました (8)
 お笑い大会では、[まんじゅうこわい]のト書き、○、×、△の役をしました。出だしだったので内心ドキドキでした (9)
 最初、私は落語はむずかしいものだと思って、最初の道場のとき、少々不安でした (10)
 「お笑い大会」では、高座にあがって見ているひとよりも上から言うなんて、顔が真っ赤になるほどきんちょうしました (14)

子どもたちは「自信は、ありませんでした」「落語はむずかしいものだ」という事前の不安に続き、「なかなか覚えられなかった」、「覚えきれず」台本を見た、という練習中の困難さを味わって

る。最初はおもしろそうだと思っていたのに、やっている間に「練習すると難し」かった、「むずかしいという事がわかった」という困難さに気づく様子もわかる。そして最後になっても「きん張してちょっとまちがえたり」、「うまく言えなかった」、「何も言えませんでした」、「ドキドキでした」など、緊張し失敗したことを記している。

しかし、子どもたちがその苦しさや失敗の反省や言い訳のためにこの感想文を記しているわけではないことが、次の【達成感／満足】の主題でまとめた感想から見えてくる。

【達成感／満足】

家で何回も何回もくり返し練習したら本を見なくてもできるようになりました。その時はすごくうれしくて家族のみんなにも話を聞かせてやりました（1）

四回目の当日きん張してたけど、上手くって良かったです（1）

けれどもうまくできてよかったです（2）

最後までできてよかったです（4）

うまくやれました（5）

修了笑書と「冷静に熱動す」と書いた色紙をもらって終わりました（5）

でも、最後のせりふ（※ママ）は、本を見ずに言えたのでうれしかったです（8）

でも、自分のせりふをしっかりと覚えて、よかったです（9）

道場の発表の日。みんなが、笑ってくれたり、「おもしろい。」を言ってくれたりして、うれしかったです（14）

最後は、みんな笑ってくれて、よかったです（15）

練習したらできるようになり家族にも聞かせたこと、発表会でうまくやれたこと、最後までやれたこと、せりふをしっかりと覚えて言ったこと、みんなが笑ってくれたことなど、【達成感／満足】の主題には、イベント全体への感想や喜びではなく、子どもたち自身が行った具体的な活動への達成感や満足を表す感想文を分類した。【達成感／満足】にある感想文のすべてが、【困難】の感想文（子ども1, 2, 4, 5, 8, 9, 10, 14）に続いていることが注目される。子どもたちは大変な苦勞をした。しかし、単に苦勞をしたという思い出に終わらず、達成感と満足として帰結していると言える。翻って、達成感または満足を味わうためには、困難を味わい、それを乗り越えることが必要だったと考えられる。では、子どもたちはなぜそのように困難を乗り越えることができたのだろうか。

子どもたちは自らの努力についても記している。その部分を主題【自分の努力】として分類した。

【自分の努力】

家で何回も何回もくり返し練習したら本を見なくてもできるようになりました（1）

29日まで練習をして、おわらい大会の日はいつもより早く行きました（5）

練習どおり上手くってよかったです（14）

怖い話と、楽しい話しをした時です。私は、みんなよりも話し方がどうやったらうまくいくか

を考えながら、話しをしました (15)

本番に出れなかったのは、残念だったけど、練習でがんばれたのでよかったです!! (16)

「くり返し」「一生けん命」「練習」「がんばれた」のことばから、家やイベントの会場で何度も練習を繰り返す子どもたちの姿が目につく。自身で頑張ることによって初めて困難さを乗り越えることができたのであろう。ここにははっきりと話そう、伝えよう、聞かせようという姿勢が見られる。このような姿勢はどのように作られたのか。その要因として、主題に浮かび上がった【仲間の存在】と【指導者（圓窓）】がヒントになる。

【仲間の存在】

いっしょに学んだ人たちと仲良くなれた (2)

お笑い道場に参加して今年で2回目。その間に、私には友達も師しょうも仲間もできました。

(3)

初めは友達ができるか心配だったけど、友達になれた人がいたのでよかったです (12)

子どもたちが直面した困難は、文字にこそ表れていないが、6回の塾に通い続けることでもあっただろう。圓窓が「くり返し励ました」とする大きな声を出すことでもあっただろう。そして、自分の名前の由来や怖い話かおもしろい話を仲間に披露するという課題を出され、落語を覚えるという大きな困難があった。その困難を抱える活動をしながら、自分の話に聴衆としてうなずき、時には笑い、ときには理解できないという表情を見せ、私的なおしゃべりをする塾の自分以外の子どもたちは、「仲間」であり競争相手でもあったはずである。その仲間がいたことは、困難を乗り越えることができた要因の一つになったであろうことは想像に難くない。そして、指導者圓窓の存在にも子どもたちは言及する。

【指導者（圓窓）】

思ったよりやさしい師匠で、分かりやすくやさしく教えて下さいました (1)

三遊亭圓窓師匠が授業の中によくおもしろい事を言って、その言った事がおもしろくておもしろくてたまらなかったです (2)

三遊亭圓窓師匠、ありがとうございました (4)

修了笑書と「冷静に熱動す」と書いた色紙をもらって終わりました (5)

色紙の「やればできるさ」をわすれず、これからもがんばりたいと思います (8)

圓窓師しょうはすごく話がうまくて、表し方がとても上手でした (9)

圓窓師匠は、言い方やコツを、分かりやすく教えてくださいました (15)

圓窓師匠の「寿限無」は、わたしが思っていたよりとてもリアル?でかっこいいなと思いました (16)

圓窓師しょうは、たしか「悲しませるのは、落語じゃない」と言ったと思います (9)

圓窓の教え方が「わかりやすく」「やさしく」「おもしろく」、「話がうまく」「表し方がとても上手

で「リアル?でかっいいい」という。落語協会の公式記録によると、圓窓が噺家に入門したのは1959年である。本稿分析対象のきらめき塾開催年である2004年までの45年間にわたり積み上げてきたところの、噺を伝える職業専門家としての技量の高さが、子どもたちを魅了している。話すことの指導者は話すことの高い技量を自らが持つ必要があることが、ここに強く示唆されている。また、噺家として先輩噺家たちから教えを受け、同年代の噺家や若手に教えを授けてきた。その積み重ねと自ら信じるところによって身に着けてきた指導のあり方、すなわち目標をその場限りではなく将来にわたる願いとして託し励ますという姿勢は、本稿3.1でも明らかにしたとおりである。【指導者（圓窓）】に分類した子ども（5）と（8）の感想は、圓窓が子どもに与えた色紙に書かれたことばがそれぞれ異なることをうかがわせる。一人ひとりの子どもの様子を観察し、その子に合ったことばを用いた評価や励ましであることがわかる。そこには、色紙を書いた圓窓の温かさが表れている。このような指導者の様子を、「言った事がおもしろくておもしろくてたまらなかったです」と表現する子どもの気持ちの高揚が伝わってくる。

子どもたちは話す教材としての落語にも注目している。落語という教材への興味が子どもたちの話す意欲を刺激したことがうかがわれる。

【落語という教材】

「落語ってなんだろう」これが参加して一番最初に思ったことです。圓窓師しょうは、たしか「悲しませるのは、落語じゃない」と言ったと思います。わたしは、落語のことがすこし、分かったような気がしました（9）

クラスみんなにも、もっと落語を知ってもらいたいと思いました（10）

落語は、難しいけど、機転のきいた話や聞きおえた後は、心の中が温かい笑いでいっぱいになるので、すごいと思いました（13）

落語は、みんなに笑いを広げ言ってる（※ママ）人も笑えて、楽しくしてくれるものだと思いました（14）

「次」や「将来」について語ることばが多いのも、特徴的である。一度のイベント参加に満足するだけでなく、参加をきっかけに次にまた何かをしたいと思わせるイベントであったことがわかる。

【次回／未来】

来年も挑戦してみたいです（1）

この後、どんな苦しい事があってもお笑い道場の事を思いだして、笑いとばしてがんばっていきたいです（3）

ぼくがこのお笑い道場に出ようと思ったのは、ぼくの将来の夢がお笑いタレントだからです。そして、この道場でお笑いのごくいを教えてもらおうと思ったからです。でも、わかりませんでした。だけど、今はわからなくてもいつかわかる時がくるのではないかと思います。（中略）そして、この道場に出てまた一歩夢に近づけたと思います（6）

次回する時は、一人で、本当の落語みたいに、やりたいです (7)
 色紙の「やればできるさ」をわすれず、これからもがんばりたいと思います (8)
 来年もあつたらぜひ一人でやってみたいと思いました (10)
 こないろんなことが学べたので、また行きたいなと思いました (11)
 ユーモアのセンスがみげたのでいつか友達を笑わせてみたいです。(12)
これからも“笑い”で楽しくしていきたいです (14)

その他の感想は【活動全体への感想】という主題でまとめた。この主題に関連して注目したいことが二つある。

一つは、「心に残っている」ことが、怖い話／おもしろい話の経験であるといくつか記されていることである。塾の活動は「落語の授業」であり、最終日に人前で発表をするという一大イベントがあった。それでも子どもの心に残った活動は、宿題を課され、あれこれ調べ、話し方を考えて、自分しか知らない話を仲間に伝える活動であったというのである。自ら考え動き、それを話し、聴衆が反応したということに子どもたちが大きく感動し、成長していることが推察される。

二つ目は、この主題を含め本章で紹介した子どもたちの感想に、他の子どもと同じ表現が全くと言っていいほど見られないことである。前述のように、圓窓ホームページに転載される際、参加者の感想文は圓窓や編集者によって取捨選択されることなく、表現を変えられることもなく、転載された。子どもたちの一人ひとり異なることばは、それぞれの子どもの感動が本当の自らのことばによって表現されていることの証明ではないだろうか。作り物ではない、型通りではない子どもたちのことばに、塾に参加した子どもたちにとっての経験の大きさを思わずにいられない。

【活動全体への感想】

楽しい元気な落語にも出会えて、私も元気になったような気がします (3)
 私は、落語から元気と笑いをもらいました (3)
 すごくおもしろかったです (4)
 良い体験ができたと心から思っています。この道場に出れて本当に良かったと心から思っています (6)
 経験して、落語で、オチをつけて話のが、好きになりました。(7)
 最初はぼくのこと、覚えてくれているかどうか気になりましたが、道場に参加するうちに気にならなくなっていました。(8)
 最初、私は落語はむずかしいものだと思って、最初の道場のとき、少々不安でしたが、道場はとても楽しくて、毎週道場に行くのが楽しみでした (10)
 こわい話とおもしろい話の 때가とてもおもしろくて、よく心に残っています (13)
 素晴らしい日本の文化を体験出来たことをうれしく思います。(13)
 私は、「おもしろい話を考えよう」というところが、一番心に残っています (14)
 他の群読も、一人での落語もおもしろく、私も楽しかったです (14)
 大きな声をあまり人前で出したことがなかったので、すごく緊張したけど、とてもいい経験が出

来ました (15)

(筆者補筆：心に残ったことは) 怖い話と、楽しい話しをした時です。私は、みんなよりも話し方がどうやったらうまくいくかを考えながら、話しをしました (15)

3.2.3 考察のまとめ

本章では、お笑い道場では何が行われたのか、この活動が子どもの話そうとする姿勢を涵養できたのか否か、そしてその成否の要因は何であったのかの3つの問いを立て、子どもたちの感想文からお笑い道場の活動の全体像を捉え、参加者の心情と成長について考察した。その結果をまとめると、イベントの活動と子どもたちの心情の流れが以下のようにまとめられる。

子どもたちは期待と不安を持って塾に参加した。塾では、自らのことばで語る課題と、落語を練習し発表するという課題が与えられた。自らのことばで語る課題は、自分自身の名前の由来という自分にしか語れない内容と、「怖い話／面白い話」の披露という話し方の工夫が必要な課題であった。落語の課題は、ただ練習することが課題ではなく、また、ただ発表することが課題だったわけではない。発表するために繰り返し練習することが求められたが、中には求められる以上に一生懸命練習した子どももいたことがわかった。最後の発表は、指導した圓窓自らが「誰もが心配していたが、誰もが感動した。笑った。泣いた」と記す感動的なものであった。それは、困難に直面し不安を覚えながらも、子どもたちが自ら努力したことの結果であった。

このお笑い道場で子どもたちの話そうとする姿勢が涵養されたことは、疑いようがない。その要因は、まず、共に話を伝え合い聞き合う相手の存在である。教師だけに向かって話すのではない。共に学び合う者の存在、あるいは聴衆としてその場にいる聞き手の存在を意識したとき初めて話そうとする意欲を持つ。次に、指導者の存在である。指導者は語りの専門家として子どもたちの目標となる存在であり、指導者自身の話そう伝えようとする姿勢が子どもたちに力を与えたことであろう。さらに、その指導者の適切な目標設定と適切な助言により、子どもたちはあと少しの努力をすれば目標に手が届くことに気づき、行動している。最後に、教材の選定も授業活動に大きな影響を与えたこともわかる。お笑い道場ではそのイベントの性質上、落語という教材が最良のものであった。目標とする語りに応じた適切な教材の選択がなされることが成功の要因となったと言える。

4. おわりに

本稿では参加者のことばを丁寧に考察することで、可能な限り主観に陥らないことを心掛けた。しかし、分析において主観に引きずられた面がなかったとは言えない。その反省の一方で、授業の成否や学習者の成長は数字では測りきれないものであり、実践者と学習者双方の「主観」に根差すものであると主張したい気持ちもないわけではない。この「主観」に説得力を持たせる鍵となるものは、分析方法であろう。今後は質的研究の分析手法について検討を重ね、話そうとする姿勢を涵養するための授業のあり方や授業実践者の姿勢のあり方について、科学的に説得力のある論を構築していきたい。

付記

本稿執筆中に鬼籍に入られた三遊亭圓窓師匠のご冥福をお祈りするとともに、落語の授業に関する長年のご教示ご協力に心から感謝申し上げます。

【参考文献】

- 川崎加奈子 (2014) 『『落語』と『グローバル人材育成』 - 伝える力を養う教材としての落語の可能性 -』長崎外国語大学論叢 第18号, pp.41-54
- 圓窓落語大百科事典『だくだく』教科書の中の落語 - 子どもの落語教室 -2004年度富山県・きらめき未来塾 <http://ensou-dakudaku.net/kyoka/rgkyst.htm> (2022年9月22日最終閲覧)
- 公益財団法人富山県ひとづくり財団きらめき未来塾 <https://www.t-hito.or.jp/zaidan/kodomo/kirameki/index.html> (2022年9月16日最終閲覧)
- 公益財団法人 富山県ひとづくり財団 <https://www.t-hito.or.jp/zaidan/index.html> (2022年9月16日最終閲覧)
- 文部科学省学習指導要領「生きる力」第2章各教科第1節国語 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/koku.htm (2022年9月12日最終閲覧)
- 落語協会ホームページ芸人紹介 - 三遊亭圓窓 https://rakugo-kyokai.jp/variety-entertainer/member_detail.php?uid=15 (2022年9月20日最終閲覧)